

J E Cの源流と歴史的遺産 7

17世紀の正統主義神学とJ E C

一宮基督教研究所 安黒務

17世紀の正統主義神学とJ E C

前回は、「信条」がプロテスタントとしてのJ E Cの信仰の根源を表現するものでもあることをみました。今回は、17世紀に登場した多くの神学的著作とJ E Cの関係を考えてみましょう。

宗教改革の果実の組織化・体系化

キリスト教神学史上、この17世紀は、普通、プロテスタント正統主義の時代と呼ばれています。この時期に宗教改革の数々の果実が**一つの神学的体系に組織化**されることになりました。その結果成立を見るに至った神学は、それ以後のあらゆるプロテスタント神学にとって**規準的**なもの、あるいは**起点**とみられるところから、“**正統的**”(orthodox)と呼ばれるようになりました。

J E Cの神学体系の基本的根幹のルーツはここに

正統主義神学について基本的な点を確認しておきますと、第一に、この時代の神学的文書を無批判に、また、置かれていたその歴史的状況から切り離して読むべきではありません。しかし、第二に、これらの神学的文書は、プロテスタント・キリスト教の組織的な解説の“**オリジナル版**”を提供しているという事実を忘れてはなりません。この意味において、所属教派のいかに問わず、いかなる教派のキリスト者も看過することの許されない世界であると言えます。第三に、用いた当時の方法論について今日いろいろとされていますが、17世紀の神学者たちは、**歴史的な意義を有する重要な文書資料**はすべてあっています、宗教改革者たちに一番近くあった者たちとして、**改革者たちの語ったことを保存**するとともに、それをできる限り**正確に再生復元**しようと努めました、**驚くべき熱心さと徹底さ**を持って**聖書そのもの**を調べ、できる限り**正確かつ忠実に聖書の教えを系統立てて**捉えようと努めました。第四に、今日の福音派にとって、そしてJ E Cにとっての**福音主義神学の基本的根幹**の多くは、この時代の神学にそのルーツを見出すのです¹。

今は亡きスベリ師の推奨されたルイス・ベルコフの「組織神学」、高橋昭市師の教えてくださったヘンリー・シーセンの「組織神学」、そして現在用いられていませんミラード・エリクソンの「キリスト教神学」のルーツもここにあります。

17世紀正統主義神学とJ E C神学との連続性

アメリカ福音派の神学の発展において、きわめて重要な位置を占めているのが“**古プリンストン神学**”です。その母体となったプリンストン神学校の初期において、17世紀正統主義神学の時代の**トゥレティーニの『組織神学』**全三巻が教

科書として使われていました。そして、当時同校の組織神学教授でありました**チャールズ・ホッジの『組織神学』**全三巻(1871-72年)と、ホッジをもとにして書かれたバプテスト派の**オーガスタス・ストロングの『組織神学』**(1907年)を通して、トゥレティーニの神学思想はアメリカ福音派の中に広く伝わっていったのでした。私たちは、17世紀のプロテスタント正統主義と近代の福音派の神学、そしてスウェーデン・バプテストを経て継承されているJECの神学との**連続性**をはっきりと認識する必要があります。

ホッジなかりせば、全く異なった形をとったかも

ここで、ホッジについて紹介させていただきます。ホッジは卒業後わずか三年目の1822年、敬愛する恩師と並んでプリンストン神学校の教授陣に加わりました。のちにはもっと榮譽ある椅子から、彼はアメリカの教会を**アメリカのトゥレティーニのように**眺め渡しました。彼が**講義を続けた40年間**に、三千人以上の学生を通して、長老派および他の教派の中へ、またアメリカ国内、および世界の遠隔地にまでもたらされました。さらに『**プリンストン・レビュー**』誌のぎっしりつまった頁を通して、それ以外の数え切れない多くの人々に、その教説は届きました。ホッジは「**アメリカの生んだ最も偉大な神学者**」であるという評価は少し熱烈すぎるかもしれませんが、しかし**ホッジなかりせば**、アメリカの長老主義とアメリカのカルヴァン主義は、**全く異なった形をとったかもしれない**」というダンホフの言葉はたいして誤ってはいないのですⁱⁱ。

旅行の道具としての**コンパスにおける小さな誤差**は、私たちが長い距離を旅したとき、かけ離れた場所に進んでしまうことにもなりかねません。いみじくも、ある神学者はこのように申しました「政治は神学の次に男らしい仕事である」と、つまり神学に取り組むことこそ、この世界で**最も男らしい仕事**なのだ。バプテストの流れでは、伝道と牧会の現場での実績が働き人に対する評価の物差しになる傾向があります。しかし、群れの将来のあり方を左右しうる神学のあり方に日夜没頭している神学者たちへの適切な評価と支援もまた、主の働きの重要な部分なのです。

JECの、そして福音派全体にとって基準的な組織神学書

最近、光栄なことに「いのちのことば社」から委託されて一冊の組織神学書を翻訳させていただきました。それは、**JECの、そして福音派全体にとって基準的な組織神学書**と高く評価されています**ミラード・J・エリクソンの「キリスト教神学」**で、トゥレティーニ ホッジ ストロング エリクソンという連続性の中でみることのできるものです。

今日の福音派における卓越した指導者のひとりであるJ・I・パッカーは以下の書評を寄せています。「過去10年の間、ミラード・エリクソンの『キリスト教神学』は、それ自身でキリスト教の真理についての現代のプロテスタントの概

要の、最も広範に用いられ、最も一般的に役に立つものとして実証されてきました。強靱な福音主義者で本質的に保守的、一貫して現代的で確固たるバプテスト、穩健カルヴァン主義者で慎重な大患難後再臨説・前千年王国説に立ち、選択肢に対しては偏見をもたず、広範な態度をたずさえ、詳細かつ正確に分析する能力は、『キリスト教神学』に対しての一貫した賞賛を勝ち取ってきました。学生の教科書として、牧師と信徒リーダーの資料としての有益さはさらに豊かなものとなっています。要するに、『キリスト教神学』は名匠のたくみのわざなのです。ⁱⁱⁱ」

J E C の必読書、最良の組織神学書、通読を推奨される書籍

J E C は非常に恵まれた群れだと思います。それは、糸の切れた凧のようにムーブメントの風に吹きあおられる群れではなく、烏合の衆のように集められ、献金と人数を誇る群れでもなく、明確な神学的座標軸を宿し、歴史的な輪郭を描くことのできる内容豊かな、高貴な群れであるからです。今後、J E C の教職者や信徒リーダーの方々がエリクソンの「キリスト教神学」を読んでくださり、その価値を認め、J E C の必読書(ドッカーリー)、最良の組織神学書(チェイニー)、通読の時間をとるように推奨される書籍(ブッシュ)として未永く愛好されていくことを願っています。ちなみに、「キリスト教神学」第一巻は、2003年3月のエリクソン来日に合わせて出版される予定です。

i 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、pp.104-107

ii S . E . オールストローム「アメリカ神学思想史入門」教文館、pp.58-59

iii Millard.J.Erickson、“Christian Theology”、Baker、書評